



Soka University Education Society

# 創価大学教育学会 第17回教育研究大会

2019（平成31）年2月16日（土）

## 研究発表要旨集録



創価大学教育学会



## 目 次

大会プログラム	2
参加者・発表者へのご案内	3
会場図	5
口頭発表	7
・ タイの母親の楽観主義的傾向と養育態度に関する研究 Kannatikorn Piyarat	
・ 韓国における親の離婚と子どもの感情の変化に関する質的研究 柳秀キョン	
・ 障がいの疑いをもつ園児への保育士の対応に関するプロセス—韓国の保育士へのインタビューを中心に— 安世羅	
・ 現実的楽観主義と主観的幸福感の関係に関する一研究 アニーシャ・ニシャート	
・ 幼稚園教育における幼児の表現の育ちに関する研究—ごっこ遊びにおける幼児の表現の育ちと社会認識の芽生えについての—考察— 清水百合香	
・ アートが引き出す子どもの可能性～ 2学年図画工作科による実践を考察する ～ 堀 宏輔 宮下孝義	
・ 保育者が捉える「気になる子」の育ちとは～「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿の10項目」に照らして～ 榊原久子	
・ 起業家教育支援ハンドブック有効性の検討 加藤 駿 南部大輝	
ポスター発表	17
・ 乳幼児への言葉かけ「伝達・非伝達」経験の感情に関する研究 戸田大樹	
・ 乳幼児への語彙選定「伝達・非伝達」経験の感情に関する研究 戸田大樹	
・ 乳幼児の食育自然体験の実践事例と一考察 高橋健司	
・ 授業における先行オーガナイザーの導入が学習成果に及ぼす効果の検討 新谷しづ恵	
・ 幼児のスマートフォン使用に関する保護者の意識—逐語録を基にしたテキストマイニングによる分析— 岸 正寿	
自主シンポジウム	23
・ 現代における幼児教育・保育の現状と課題 戸田大樹	
・ 教員の専門性を活かす学校経営～「自律性」を視点とした学校の創造を考える～ 橋本和男	
・ インクルーシブ教育システムにおける特別支援教育の未来を考える ～小学校・中学校・高等学校の現状から～ 山内俊久	

## 大会プログラム

### ○口頭発表 10:00～12:00 B401・B404

時間	<B401> テーマ・発表者(筆頭者)	<B404> テーマ・発表者(筆頭者)
10:00	タイの母親の楽観主義的傾向と養育態度に関する研究 Kannatikorn Piyarat/創価大学大学院文学研究科博士前期課程	幼稚園教育における幼児の表現の育ちに関する研究—ごっこ遊びにおける幼児の表現の育ちと社会認識の芽生えについての一考察— 清水百合香/創価大学通信教育部教育学部
10:30	韓国における親の離婚と子どもの感情の変化に関する質的研究 柳秀キョン/創価大学大学院文学研究科博士前期課程	アートが引き出す子どもの可能性～2学年図画工作科による実践を考察する～ 堀 宏輔/神奈川県茅ヶ崎市立浜之郷小学校
11:00	障がいの疑いをもつ園児への保育士の対応に関するプロセス—韓国の保育士へのインタビューを中心に— 安世羅/創価大学大学院文学研究科教育学専攻後期課程	保育者が捉える「気になる子」の育ちとは～「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の10項目」に照らして～ 榎原久子/新渡戸文化短期大学生活学科児童生活専攻
11:30	現実的楽観主義と主観的幸福感の関係に関する一研究 アニーシャ・ニシャート/創価大学大学院文学研究科博士後期課程	起業家教育支援ハンドブック有効性の検討 加藤 駿/創価大学教育学部教育学科宮崎猛研究室

### ○ポスター発表(掲示時間) 10:00～12:00 B303

No.	在籍時間	テーマ・発表者(筆頭者)	
1	10:00～10:30	乳幼児への言葉かけ「伝達・非伝達」経験の感情に関する研究 戸田 大樹/創価大学教育学部	
2	10:30～11:00	乳幼児への語彙選定「伝達・非伝達」経験の感情に関する研究 戸田 大樹/創価大学教育学部	
3	11:00～11:30	乳幼児の食育自然体験の実践事例と一考察 高橋 健司/創価大学つばさ保育所	授業における先行オーガナイザーの導入が学習成果に及ぼす効果の検討 新谷しづ恵/聖徳大学大学院児童学研究科
4	11:30～12:00	幼児のスマートフォン使用に関する保護者の意識—逐語録を基にしたテキストマイニングによる分析— 岸 正寿/生田ひまわり幼稚園	

### ○自主シンポジウム 13:30～15:30 3階・4階教室

会場	テーマ・企画者	話題提供者・指定討論者
B401	現代における幼児教育・保育の現状と課題 戸田 大樹/創価大学教育学部	話題提供者1 角田富美子 元東京都公立幼稚園園長 話題提供者2 榎原 久子 新渡戸文化短期大学 話題提供者3 小山 容子 創価大学児童教育学科 話題提供者4 高橋 健司 創価大学つばさ保育所 話題提供者5 岸 正寿 生田ひまわり幼稚園
B404	教員の専門性を活かす学校経営～「自律性」を視点とした学校の創造を考える～ 橋本 和男/創価大学教育学部	話題提供者1 古家 義伸 東京都小金井市立本町小学校元校長 話題提供者2 澤登 一浩 山梨県南アルプス市立若草小学校 校長 指定討論者 浜田 博文 筑波大学教育学域学校経営学 教授
B301	インクルーシブ教育システムにおける特別支援教育の未来を考える～小学校・中学校・高等学校の現状から～ 山内 俊久/創価大学教育学部	話題提供者1 高階美恵子 臨床発達心理士 話題提供者2 深谷 純一 東京都教育庁指導部特別支援教育指導課 話題提供者3 濱辺 清 東京都教育庁中部学校経営支援センター 経営支援室 指定討論者 加藤 康紀 元創価大学教育学部児童教育学科

## 創価大学教育学会 第17回教育研究大会 参加者・発表者へのご案内

### 1 参加受付・手続き

2019（平成31）年2月16日（土）9：45～15：30

研究発表各会場にて受付名簿に所属氏名を記載してください。

### 2 研究発表論文集

当日会場に抄録を用意するほか、本会ホームページ会員専用ページにて公開しますので、事前にご覧ください。

### 3 昼食・休憩場所のご案内

学生ホールの売店、中央教育棟ローソン、ロワール食堂1Fが営業していますのでご利用ください。

休憩場所としては、教育学部棟2Fラウンジ、学生ホール2Fラウンジ、中央教育棟B1ラウンジをご利用ください。

### 4 会場へのアクセス <https://www.soka.ac.jp/access/>

大学へのアクセスは、上記URLからご覧ください。一般来学者用駐車施設には限りがありますので、できるだけ公共交通機関の利用をお願いします。

車椅子利用の方は、あらかじめ大会事務局へ、1月27日までにメール E-mail [wwwsuesjp@gmail.com](mailto:wwwsuesjp@gmail.com) でお知らせください。

### 5 その他

ご不明の点がありましたら、大会係員にご遠慮なくお尋ねください。

### 6 研究発表関係者へのご案内

[口頭発表]

#### (1) 発表場所・時間

別表のとおりです。発表セッション開始15分前までに会場にお越しください。

#### (2) 発表時間

発表 20分 質疑応答時間 5分

進行係が、発表開始後17分と20分に時間経過をお知らせします。

#### (3) 発表用機器

会場にパソコン(Windows PC (Microsoft Office 搭載))を用意しておりますので、そちらをご使用ください。発表データをUSBフラッシュメモリに保存して持参してください。

なお、様々な条件により動作に支障をきたす場合がございますので、特に動画データなどを利用される方は、動作確認されたご自身のパソコンをご持参ください。

#### (4) 補助資料について

研究発表の資料は発表論文集をあてるのが原則ですが、補助資料の配布が必要な場

合には、事前に発表者が必要部数を用意してください。

[ポスター発表]

- (1) 10:00 発表開始に間に合うよう、会場 B303 にて、掲示等の準備をお願いします。
- (2) 本大会のポスター発表は、自由討論の形式で行います。
- (3) ポスター発表は、発表時間 120 分のポスター掲示、在籍責任時間 30 分の自由討論を満たした場合、正式発表とみなされます。
- (4) ポスター発表の掲示・在籍責任時間は、別表の通りです。掲示時間終了後は、速やかにポスターの撤去をお願いします。撤去されない場合は、運営側で撤去しますので、ご了承ください。
- (5) ポスターの大きさは、A0 縦位置で 1 枚+縦方向 0.5 枚以内です。掲示位置の左上に横 20 センチ×縦 10 センチの別表のポスター番号を掲示いたしますので、その位置に掲示してください。(掲示用の磁石等は運営側で用意します。) \*会場に余裕がありますので、横方向に広げる希望がある場合は、大会事務局へ、1 月 27 日までにメール E-mail [wwwsuesjp@gmail.com](mailto:wwwsuesjp@gmail.com) でお知らせください。

ポスターの最上部には発表題目(フォントサイズ目安: 72 ポイント)、発表者氏名(筆頭発表者に○印をつける)、および所属を明示してください。ポスター作成の際には、文字の大きさや図表のやすさに注意し、2 メートル離れたところから全体が読めるようにしてください。

(6) 補助資料について

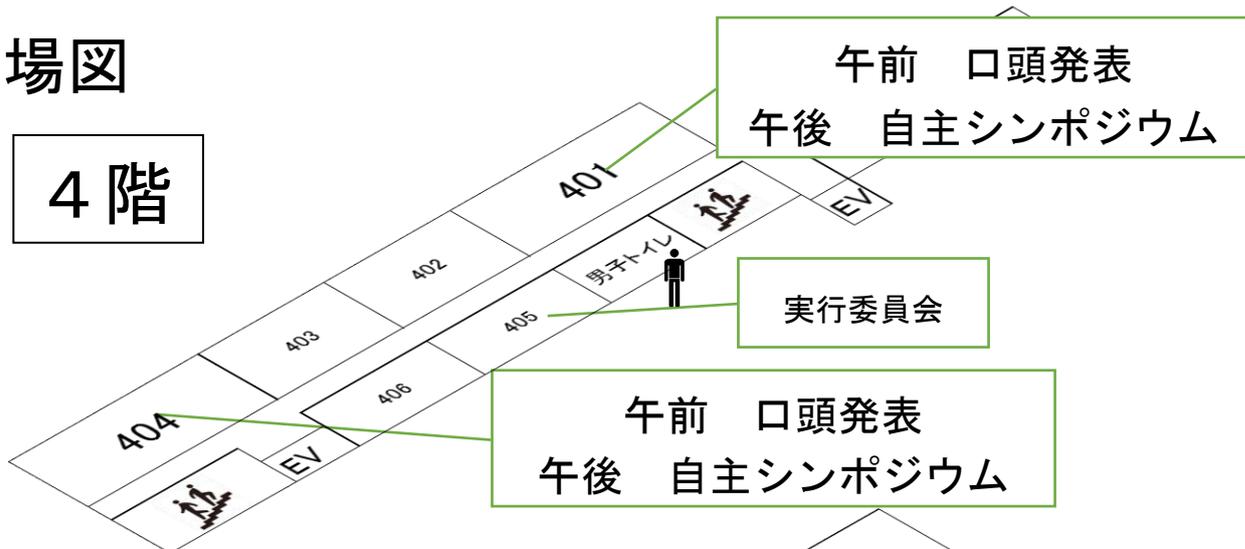
補助資料の配布が必要な場合には、事前に発表者が必要部数を用意してください。

[自主シンポジウム]

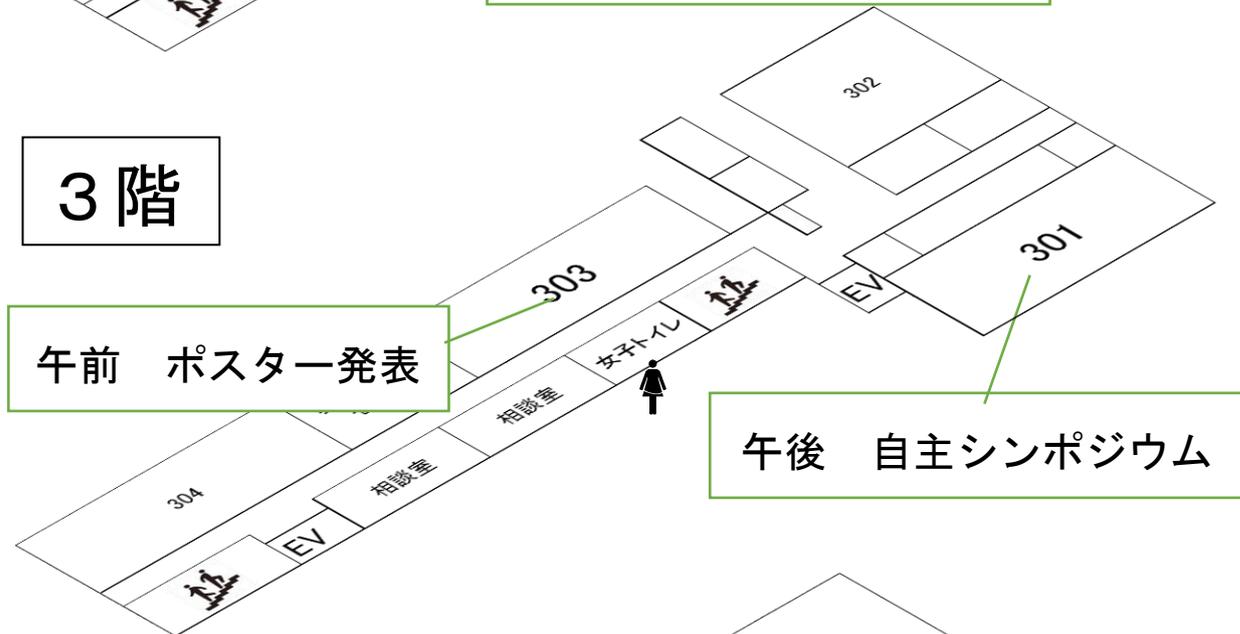
- (1) 各シンポジウムの発表時間は、1 時間 30 分~2 時間です。発表の時間配分は司会者にお任せしますが、所定の時間になりましたら、終了し現状復帰していただくようお願いいたします。
- (2) 関係者は、当日 13 時から 13 時 15 分までに、B405 運営本部までお越しください。使用教室の機器機の鍵をお渡しします。
- (3) 会場は PC、プロジェクター、マイクロフォンの使用が可能です。動画の利用等、環境に不安がある場合は、パソコンをご持参ください。機器の操作はご自身でお願いいたします。
- (4) 補足資料を配布される場合には、事前に必要な部数をご用意ください。
- (5) 終了時に、参加者への忘れ物等の注意喚起をお願いします。

# 会場図

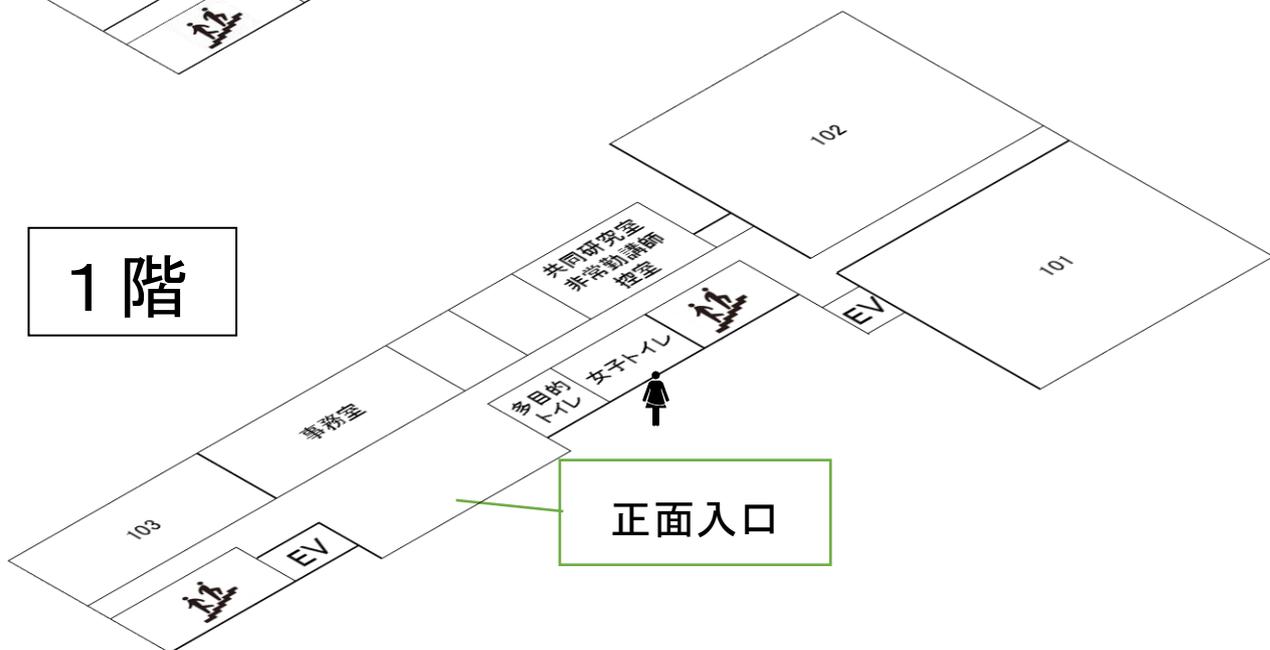
## 4階



## 3階



## 1階



\*男子トイレは2,4階 女子トイレは1,3階にあります。



## ○口頭発表 10：00～12：00

### B401

時間	テーマ・発表者（筆頭者）
10：00	タイの母親の楽観主義的傾向と養育態度に関する研究 Kannatikorn Piyarat／創価大学大学院文学研究科博士前期課程
10：30	韓国における親の離婚と子どもの感情の変化に関する質的研究 柳秀キョン／創価大学大学院文学研究科博士前期課程
11：00	障がいの疑いをもつ園児への保育士の対応に関するプロセス—韓国の保育士へのインタビューを中心に— 安世羅／創価大学大学院文学研究科教育学専攻後期課程
11：30	現実的楽観主義と主観的幸福感の関係に関する—研究 アニーシャ・ニシャート /創価大学大学院文学研究科博士後期課程

### B404

時間	テーマ・発表者（筆頭者）
10：00	幼稚園教育における幼児の表現の育ちに関する研究—ごっこ遊びにおける幼児の表現の育ちと社会認識の芽生えについての—考察— 清水百合香／創価大学通信教育部教育学部
10：30	アートが引き出す子どもの可能性～ 2学年図画工作科による実践を考察する ～ 堀 宏輔／神奈川県茅ヶ崎市立浜之郷小学校
11：00	保育者が捉える「気になる子」の育ちとは～「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿の10項目」に照らして～ 榊原久子／新渡戸文化短期大学生活学科児童生活専攻
11：30	起業家教育支援ハンドブック有効性の検討 加藤 駿／創価大学教育学部教育学科宮崎猛研究室

## タイの母親の楽観主義的傾向と養育態度に関する研究

○KANNATIKORN PIYARAT

鈎 治 雄

(創価大学大学院文学研究科博士前期課程)

(創価大学教育学部)

キーワード：母親、楽観主義、養育態度、受容的養育態度、子ども中心主義的養育態度

### 問題と目的

本研究では、(1)楽観主義的傾向をもつタイの母親と養育態度との関係について検討する。ポジティブ特性の重要な側面である現実的楽観主義的傾向にある母親は、子育ての現実を正確に認識しつつ、将来を見据えた柔軟な対応力をそなえていることが予想されるため、子どもに対する養育態度の面でも、受容的で、子どもの考えに理解を示し、大切にしている傾向にあることが考えられる。本研究では、以上の点に加えて、(2)母親の楽観主義的傾向が、子どもの楽観主義的傾向とどのように関連しているのか、また、(3)母親の養育態度が、子どもの楽観主義的傾向とどう関連しているのかについても検討した(研究Ⅰ)。

加えて、母親の楽観主義的傾向と養育態度について詳細に検討するために、母親にインタビューを行なった。楽観的な母親と悲観的な母親の養育態度や価値観などがどのように異なるかについて質的な手法を通して検討する(研究Ⅱ)。

### 方法

タイの中学1年生240名とその母親240名を対象に質問紙調査とインタビュー調査を実施した。2018年2月9日に中学校の担任の先生に質問紙調査を手渡し、担任が中学生に自宅に持ち帰らせた(留置き法)。2週間後、調査用紙は担任によって回収された。質問紙調査は「現実的楽観主義尺度」全12項目(アニーシャ・鈎2018)と、「親の養育態度尺度」の全24項目(鈴木・松田・永田・植村1990)を用いた。

以上の調査に加えて、本研究では、母親の楽観主義的傾向と養育態度について詳細に検討するために、現実的楽観主義尺度(最高60-最低28点)の得点が高い母親3名<母親A,B,C>(50-59点)、及び低い得点の母親3名<母親D,E,F>(28-42点)計6名を選び取り、子育てについてインタビューを行なった。インタビューの分析に際しては、Colaizziの現象学的アプローチを用いた。

### 研究Ⅰの結果と考察(質問紙調査)

#### (1) 母親の楽観主義と養育態度

「母親の楽観主義」と母親の「受容的養育態度」との関連、または「母親の楽観主義」と母親の「子ども中心主義的養育態度(子どもへの配慮)」との関連を見るために、母親の楽観主義の低群、中群、高群と、養育態度尺度の「受容的養育態度」および、「子ども中心主義的養育態度(子どもへの配慮)」について1要因分散分析を行った結果、母親の「楽観主義」的傾向と上記の2つの養育態度は、0.1%水準で有意差が認められた。すなわち、楽観主義の程度が

高い母親では、受容的養育態度、子ども中心主義的養育態度(子どもへの配慮)が高い傾向にあることを示唆している。既に、アーパーワン(2014)は、ポジティブな性格の人は、自分自身に対して誠実で、慈悲心に優れ、人生の満足とも高く、希望的であると述べているが、今回の調査結果でも、楽観主義的な母親は、「子どもの悩みや心配ごとを理解している」などといった受容的な養育態度や思いやりの心に優れることが実証された。また、楽観主義傾向にある母親は、子どもへの気遣いや子どもへの思いが強い傾向にあることがわかる。

#### (2) 母親の楽観主義と子どもの楽観主義

「母親の楽観主義」と「子どもの楽観主義」(男女別)との関連を見るために、母親の楽観主義の低群、中群、高群と、「子どもの楽観主義」について2要因分散分析を行った結果、母親の「楽観主義」の効果が10%水準で有意な傾向にあることが認められた。すなわち、楽観主義の高い母親では、子どもの楽観主義も幾分高い傾向にあることを示唆している。

#### (3) 母親の養育態度と子どもの楽観主義

母親の「受容的養育態度」と「子どもの楽観主義」との関連、母親の「子ども中心主義的養育態度(子どもへの配慮)」と「子どもの楽観主義」との関連を見るために、母親の「受容的養育態度」と母親の「子ども中心主義的養育態度(子どもへの配慮)」の低群、中群、高群と、現実的楽観主義尺度によって測定された「楽観主義」について2要因分散分析を行った。結果、上記の2つの養育態度と子どもの「楽観主義」的傾向は0.1%水準で有意差が認められた。すなわち、「子どもの悩みや心配ごとを理解している」「子どもにたびたび話しかける」などといった受容的養育態度、また、「子どものことに、十分気を配っている」「わたしの全生活は、子どもを中心に動いている」などといった子ども中心主義的養育態度の程度が高い母親では、子どもの楽観主義が高い傾向にあることを示唆している。

### 研究Ⅱの結果と考察(インタビュー調査)

高い楽観主義の母親は、子育てに前向きで、子どもを信頼し、子どもから積極的に学ぼうとし、子どもを支援し励ます傾向にあることがわかった。一方、低い楽観主義の母親は、子育てに神経質で、過敏で、小言や文句も多く、厳しく、心配性であることがわかった。

## 韓国における親の離婚と子どもの感情の変化に関する質的研究

○柳秀キョン

(創価大学大学院文学研究科博士前期課程)

キーワード：親の離婚、養育態度、愛情

### 1. 目的

本発表では、親の離婚を経験した子どもの両親に対する感情が、どのような原因や理由、過程を経て変化していくのか、また、親の離婚に対する見方がどのように変化していくのかについて述べる。(研究Ⅰ) また、強い愛情を受けて育てられたケースと、母親の子どもに対する無関心が理由で祖母に育てられたケースの2つの養育環境の異なる事例を通して、養育環境の違いがその後の親に対する感情の変化にどのような影響を及ぼすかについて、主として双方の対象者が描いた感情曲線を手がかりにして述べる(研究Ⅱ)

### 2. 方法

質的研究(ICレコーダによるインタビュー内容の録音)として、半構造化面接による聞き取りと感情曲線を描いてもらった。面接は一人ずつに行った。結果は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いて整理した。

### 3. 結果と考察

#### 3-1. 研究Ⅰの結果と考察

① 子どもは、親権を持っている養育者に対して、親の責任感の強さを改めて実感し、感謝していることが明らかになった。逆に、親権をもっていない親に対しては、責任感が欠如していると感じたり、悲観的な感情を持っていることが浮き彫りになった。

- ② 養育者の愛情を深く感じた子どもほど、自尊心と社会性が高いことが示唆された。また、恋愛・結婚観も前向きであった。
- ③ ネガティブな恋愛・結婚観を持つ対象者は、親の離婚が原因ではなく、社会的不条理や親の養育態度の影響でネガティブになったことが明らかになった。
- ④ 親の離婚に関して、対象者は親が離婚した理由を周囲から耳にする場合が多かった。それに伴って、子どもは離婚の理由を親が説明することを望むことが分かった。

#### 3-2. 研究Ⅱの結果と考察

- ① 子どもにとって、親の離婚で大変だったことは、経済的な面が一番大きかった。そして、経済的に苦労した経験は、大人になっても影響を及ぼすことが明らかになった。
- ② 離婚家庭の子どもたちがよりよく成長していくためには、養育者の養育態度や家庭の雰囲気はもとより大事ではあるが、離婚家庭に対する社会的認識もまた、否定的なものから許容、そして包容へと変化していく必要がある。
- ③ インタビューの中で、親に対する感情曲線を描いてもらったとき、対象者は何度も親に対する感情曲線の修正を行った。そのことは、インタビューが対象者の親に対する感情を再び考える機会になり、改めて親に対する感情を確かめられる良い機会になったと考えられる。

# 障がいの疑いをもつ園児への保育士の対応 — 韓国の保育士へのインタビューを中心に —

安世羅

(創価大学文学研究科教育学専攻後期課程)

## 【はじめに】

韓国の保健福祉部 (2016) によると、一般保育園に在籍している障がい児の数は減少しているが、実際、保育士が園児の障がいに疑いを持っている場合は少なくない。また、保育園に通っている配慮児 (以下、障がい児) の障がいについて気づいた人は保護者よりも保育園関係者の方が多く、保護者に障がいの疑いについて伝えることの難しさが、負担を感じている保育士も少なくないことが示されている (笹森ら 2010)。高橋 (2007) によると、軽度発達障がい児の疑いが生じる児童の年齢をみると、3~4 歳の頃は障がいの確定より疑いの数が多く、障がいの確定は容易ではなく、それに対する早期対応が求められるという。そこで本研究では、保育士が園児の障がいに気づいた場合、保育園の適切な対応の在り方について考察し、障がいの早期発見と対応の重要性について明らかにすることを目的とする。

## 【方法】

2017 年 2 月 3 日~8 日にかけて、保育中に園児の障がいに気づいた経験がある韓国の保育士 3 名への半構造化面接とアンケート調査を行った。

## 【結果】

面接で得られたデータを M-GTA を用いて分析した結果、9 カテゴリー、18 概念が生成された。第 1 期から第 3 期までのプロセスにわけ、結果図を Fig. 1 に示した。

## 【考察】

本研究は、保育士が園児の障がいに気づいた場合、保育園の対応とそれによる影響について保育士に半構造化面接で聞き取りを行い、M-GTA を用いて分析を行った。

第 1 期では、保育士は、配慮児の他の園児とは異なる特徴ある行動について障がいの疑いを持つようになるが、確認はできないことが示された。

第 2 期には、保護者にその事実を伝えようとするが、伝える方法などについて負担を感じ、専門機関との連携をとって保護者の理解を得るために工夫がなされた。

第 3 期になると、我が子の障がいを一時は否定した保護者も、専門家との連携を通して、我が子の障がいを受け入れるようになり、治療にも力を入れ、園児の症状もよくなることが示唆された。

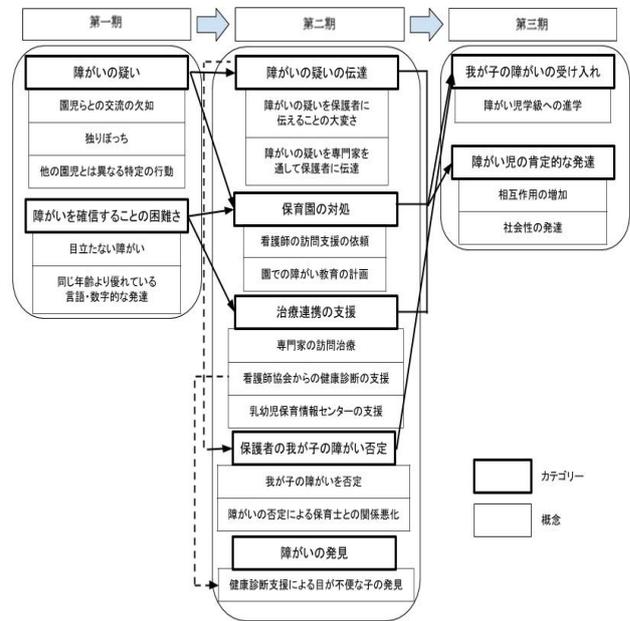


Fig. 1 保育士の対応のプロセス

今回の研究対象となった保育園は、「看護師協会からの健康診断」、「乳幼児保育情報センターの支援」、「専門家の訪問治療」を積極的に行った結果、園児の障がいの早期発見や対応が可能になった。

早期発見と迅速な対応は、障がい児の症状がよくなるだけでなく、保護者が我が子の障がいを受け入れることにも役立つことが示唆された。今後は、早期対応がうまくいかなかった事例を挙げ、早期発見や対応の課題についても明らかにしたい。

## 【参考】

保険福祉部「保育統計『障がい児専担、統合施設現況』」  
<<http://www.index.go.kr/main.do>>

笹森洋樹・後上鐵夫・久保山茂樹・小林倫代・廣瀬由美子・澤田真弓・藤井茂樹 (2010) 「発達障害の子どもへの早期発見・早期支援の現状と課題に関する研究結果」、国立特別支援教育総合研究所研究紀要 37, pp. 3—15、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所。  
高橋脩「平成 18 年度厚生労働科学研究 広汎性発達障害、注意欠陥多動性障害等の早期発見と対応に関する研究」2007 (児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度、2014)

キーワード：障がい児、早期発見、M-GTA

# 現実的楽観主義と主観的幸福感に関する一研究

○アニーシャ ニシャート  
(創価大学大学院文学研究科博士後期課程)

鉤 治雄  
(創価大学教育学部)

表 1. 主観的幸福感と現実的楽観主義(N=894)

		低群	中群	高群	計	単純主効果
男	M	72.1	84.0	95.4	83.8	男 F=194.0 p<0.001 女 F=107.6 p<0.001
	SD	11.5	8.3	8.9	12.9	
	N	129	196	129	454	
女	M	74.9	85.8	93.2	84.6	低群 F=5.39, p<0.05 中群 F=3.55, p=0.06 高群 F=2.99, n.s
	SD	11.3	8.7	8.4	11.5	
	N	119	215	106	440	
計	M	73.4	84.9	94.4	84.2	中群 F=3.55, p=0.06 高群 F=2.99, n.s
	SD	11.5	8.6	8.7	12.3	
	N	248	411	235	894	

## 1. 目的

本研究では、現実的楽観主義及び主観的幸福感の関連について明らかにする。独自に作成した主観的幸福感尺度の因子構造を明らかにし、現実的楽観主義と主観的幸福感との関係について検討した。

## 2. 方法

### (1)主観的幸福感尺度作成のための項目の抽出

① 期日：2017年8月 ②対象：首都圏の私立A大学の通信教育部生計60名。③内容：「幸福とは何か」「どのようなときに幸福を感じるか」に関する質問項目に対して自由記述で回答を依頼し、KJ法を用いて分類した結果、5カテゴリー、及び主観的幸福感に関する計28の暫定的な項目が抽出された。

### (2) 主観的幸福感尺度と現実的楽観主義尺度の実施

①期日：2017年12月。②対象：首都圏の3私立大学の1~4年生計894名(男子454名、女子440名)。

## 3. 結果

### (1) 主観的幸福感尺度の作成

暫定的主観的幸福感の28項目について因子分析を行った。その結果、5因子23項目が抽出され、これを主観的幸福感の本尺度とした。第1因子は「目標を見つけることができている」など計9項目で構成され、「人生の満足度」因子と命名した。第2因子は「周りから感謝されて幸せな気持ちになったことがある」など計6項目で構成され、「他者評価」因子と名づけた。第3因子は「勉強面で、集中できないことが多い」など計4項目で構成され、「学業の達成感」因子と名付けた。第4因子は「趣味やスポーツ、好きなことに集中して楽しめる」など計2項目で構成され、「エンゲージメント」因子と命名した。第5因子は「人のために役立っているとは思わない」など計2項目で構成され、「役立ち感」因子と名づけた。こうして5因子23項目から成る主観的幸福感尺度を作成した。

### (2)主観的幸福感と現実的楽観主義との関連

主観的幸福感尺度(5因子23項目)によって得られた主観的幸福感と、現実的楽観主義尺度(3因子12項目)によって測定された現実的楽観主義の関連について、現実的楽観主義(合計得点で分けた高群、中群、低群の3水準)と性別(男女の2水準)の2要因で分散分析を行なった。その結果、現実的楽観主義と性別の交互作用が有意になったため(F=4.6, p<.01), 単純主効果の検定を行った。結果を表1に示す。

まず、男女を問わず、現実的楽観主義の水準が上がるほど主観的幸福感が高くなった(男 F=194.0、p<0.001, 女 F=107.6、p<0.001)。現実的楽観主義の低群で、主観的幸福感には男女で有意差が出た(女が高い p<.05)。中群では男女で有意傾向がみられた(女が高い p=.06)。高群になると男女の有意差が出なかった。

また、主観的幸福感の5つの下位尺度と現実的楽観主義との関連について検討した。「人生の満足度」、「他者評価」、「学業の達成感」では、交互作用が有意であり(それぞれ、F=3.6, p<.05 F=3.2, p<0.05 F=3.6, p<0.05), 細かい違いはあるが合計得点と同様、現実的楽観主義の水準が上がるほど主観的幸福感が高くなった。「エンゲージメント」、「役立ち感」については、交互作用は有意ではなく、現実的楽観主義の水準が上がるほど主観的幸福感が高くなり(p<0.001), 性別による有意差は出なかった。

## 4. 考察

本研究によって、現実的楽観主義の水準が上がるほど主観的幸福感が高くなることが示された。したがって、主観的幸福感と現実的楽観主義は強く関連していることがわかる。今後は、双方の関連についてインタビュー調査を通じた質的研究による詳細な検討が望まれる。

キーワード：現実的楽観主義, 主観的幸福感

## 5 引用・参考文献

鉤治雄 (2013) 『楽観主義は元気の秘訣』 第三文明社

# 幼稚園教育における幼児の表現の育ちに関する研究 — ごっこ遊びにおける幼児の表現と社会認識の芽生えに関する一考察—

清水百合香

(創価大学通信教育部教育学部)

## I はじめに

人格の基礎が形成される重要な幼児期に、生活や遊びの中で、幼児が多くのことを学び、すこやかに成長を刻んでいけるように、幼児教育においても、保育の質を高めていくことが求められている。平成29年3月に改訂となった幼稚園教育要領においては、幼稚園教育の基本である「環境を通して行う教育」の考え方は変わっていないが、幼児に「生きる力の基礎」を育てるために育みたい資質・能力として「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」の3点が新たに示された。その中の一つに「思考力・判断力・表現力等の基礎」があるが、幼児が物事をどのようにとらえているのか、考えていくかという思考力の面の育ちと、幼児が人や物・出来事に対してどのような考えをもって対応していくかという判断力の育ちが求められる。そして表現力は、幼児の思考力や判断力が発揮されていくためにも必要な力である。表現の育ちということ考えた時、表現方法の広がりや、相手を意識した表現へと変化していくことなどから、社会性・社会認識の育ちということにも関連してくる。先行研究では、幼児期の社会認識の発達について、日下等(1991)の自由面接法における研究があるが、著者は、幼稚園生活の幼児の遊びの中での表現においても社会認識における育ちがとらえられると考えた。そこで遊びの中でも幼児が自発的に遊び始めていくごっこ遊びに着目した。

本研究では、幼稚園教育における表現の育ちに関して、ごっこ遊びの中での幼児の表現の育ちと社会認識の芽生えについて明らかにしていくことを目的とする。

## II 研究方法

### 1 保育観察

(1) 保育観察期間 2018年6月～9月

(2) 観察対象 都内の公立幼稚園の4歳児クラス19名  
(男児10名、女児9名)

(3) 観察方法 自然観察法を用いてごっこ遊びの観察  
2 保育観察記録における幼児の表現と社会認識の育ちについての分析・考察

## III 結果と考察

幼稚園で生活する幼児(4歳～5歳)のごっこ遊びにおける取り組みの姿から、幼児の表現と社会認識の育ちについて次のようなことが明らかになった。

○幼児のごっこ遊びにおける「表現」の育ちとして

- ・幼児は生活の中で見たことや体験したことを模倣したり、自分なりに考えたことを動きや言葉で表現したり、想像しながら友達と遊びを進めていた。
- ・時期を違えて、遊びの中における幼児の表現の仕方の変化や内容の広がりやの育ちがとらえられた。

○幼児のごっこ遊びにおける「社会認識」として

- ・ごっこ遊びで、幼児が、生活や社会における物事や人とのかかわりについて認識したことなどを言葉や動きで表現している姿がとらえられた。
- ・幼児は、社会の物事のおおまかなしくみや、つながりなどについても認識していることを、遊びの中で表現していた。それらは社会認識における芽生えであると考えられる。

○幼児が幼稚園生活の中におけるごっこ遊びの中で、自分の考えやイメージしたことをのびのび表現し遊びを進めていくことができていた背景には、幼稚園における物的環境や人的環境である教師の援助が支えとなっていたと思われる。このことは幼稚園教育の基本である「環境を通して行う教育」の実践であると考えられる。

## 参考文献

- ・平田智久・他『保育内容「表現」』2015年
  - ・日下正一・他「幼児期の子どもにおける社会認識とその発達」福島大学教育学部論集50号 1991年
- キーワード：幼児の表現、ごっこ遊び、社会認識

## アートが引き出す子どもの可能性 ～ 2学年図画工作科による実践を考察する ～

○堀 宏輔（神奈川県茅ヶ崎市立浜之郷小学校 教諭），宮下 孝義（同 総括教諭）

### はじめに

私が所属するちがさき初等教育研究会は、教室で起きている子どもの事実に即した実践報告を持ち寄り、所属するメンバーとともに考察していく会である。

回を重ねていく中で、「なぜ学年が上がるにつれて、子どもたちの学ぶ意欲が減衰してしまうのか」という問いが生まれた。そこで私は、そのような状態に陥ってしまう原因を「子どもたちが教師によってお客様化されてしまい、学びの主体になっていないことと、学びの主体になっていないことが学ぶ意欲の減衰を引き起こしている」にあると考えた。

本論の目的は、教師がどのように関われば、子どもが学びの主体となりうるのかを考えることである。

### 1 研究の方法

以下の3つの方法によって探っていく。

1つ目は教師の説明や指示的な関わりを最小限にし、子ども同士の中で交流が生まれるように、授業はアイランド型で進めていった。

2つ目は、授業の学習課題を「ならべて、ひろげて」や「たくさんの色を使ってみよう」などの技術的なテーマにし、何をつくるかは子どもたちに任せた。

3つ目は、試行錯誤できる場を設定し、子どもたちが製作や活動の中で何度でも試すことができるように、授業で扱う素材や道具をたくさん用意した。

### 2 実践の結果

4月当初、技術的なテーマをもとに授業を行うと、子どもから「〇〇はしてもいいの？」という、教師への承諾を求める質問がたくさん出てきた。そのため、「先生のために描くのではなく、自分が試したいことをどんどん試していいんだよ。先生からはみんなに色をたくさん使ってほしいと思っていますが、それ以外は自分で決めて描いてね」と伝え授業をスタートした。それでも承諾を求める質問が出てくるのだが、授業が進むにつれて質問はなくなっていった。

教師への質問がなくなると、グループでの交流が生まれ、子ども同士がつながり始めた。すると、子ども自身が「真似したいな」と思う技法があったらその子に直接教えてもらい、自分の表現へとつなげていく姿が見られた。また、学習課題を技術的なテーマにしたことによって子どもの発想が広がった。「ならべて、ひろげて」や「ならべて、つんで」、「たくさんの色を使ってみよう」などのシンプルなテーマは、子どもたちにとって活動の幅が広がりやす

く、結果的に発想も膨らみ、一人ひとりの個性あふれるものが形になっていった。

さらに、試行錯誤できる場として授業で使う素材や道具を数多く用意したことによって、子どもがうまくできなかったと思ったときや、違う方法を試してみたいときにチャレンジすることができた。たくさん試すことができると、子どもがつくったものを私のところへもってきて「これでいいですか？」と言いに來ることはなくなり、「もっとやっていたい？」と聞くようになり、自分が取り組んでいる活動に主体性をもって取り組むようになった。

### 3 実践を考察する

通常、図画工作科では、「〇〇をつくろう」というような、製作目的が最初から決められている課題や方法を教師から子どもへと伝えられる。しかし、これでは、子どもたちに「先生の言われた通りにしなくてはならない」ということを暗に伝えていることにはならないだろうか。学ぶことが教師によって与えられるものになったとき、子どもたちはお客様となってしまふ。このような体験を学校教育で積み重ねていくことで、子どもたちは、学ぶ意欲が失われていくと考える。このようなことにならないためには、教師が子どもの持つ力を信頼し、子どもが自分の考えや、やってみたいことを十分に表現できる場をつくっていくことが必要である。

また、口頭発表の場では、参考文献に照らし合わせて、子どもの能動性に関する「学ぶ意欲」について、本実践が、どのような影響を与えたかについて言及していきたい。

特に、ちがさき初等教育研究会でテキストとして学んだジョン、デューイ『民主主義と教育』にある「成長としての教育」という視点から考察した内容について報告したいと考えている。

キーワード：図画工作科、学びの主体者、造形あそび

### 参考文献

- (1) ジョン、デューイ (1975) 『民主主義と教育 (上)』松野安男訳、岩波文庫
- (2) ジョン、デューイ (1975) 『民主主義と教育 (下)』松野安男訳、岩波文庫
- (3) パウロ、フレイレ (2011) 『被抑圧者の教育学—新訳』三砂ちづる訳、亜紀書房
- (4) 苦野一徳 (2014) 『「自由」はいかに可能か』NHK ブックス

## 保育者が捉える「気になる子」の育ちとは

### ～「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の10項目」に照らして～

榊原 久子

新渡戸文化短期大学生活学科児童生活専攻

#### はじめに

平成29年3月、保育所保育指針をはじめとする保育三法が改正施行され、子どもの現状に添い、柔軟に対応するなど、保育者のもつ専門性について明記がされた。ここでは、幼児期の育ちと主体性を促す就学前教育における具体的な子どもの姿について明示され、子どもの発達等の状況を踏まえた「幼児期の終わりまでに育ってほしい具体的な姿」をイメージした豊かな教育活動の展開が求められている。一方、昨今、臨床では「気になる子」の保育が課題となっている。日本保育協会(2012)の統計では「発達上の問題(発達の遅れ・言語・理解力等)」「コミュニケーション(やりとり・視線・集団参加等)」「情緒面(乱暴・こだわり・感情のコントロール等)」「運動面(ぎこちなさ・不器用等)」などの課題を抱える子どもが在籍している施設が全体の92.7%に至っている。また、周産期医療においては、近年、超出生体重児の出生数が増加を辿り、医療的ケア児の数も、この10年で2倍に至る(厚労省2017)。このような中、先述した通り、保育三法が改正施行され、臨床では、課題を踏まえた、子どもの具体的な育ちの姿の理解と、豊かな幼児教育の実現が求められている。しかしながら、発達過程の凹凸が著しい乳幼児期において、多様な成育背景を抱える子どもの特性や育ちの理解は容易なことではない。幼児期の育ちの姿を具体的に捉えるには、まず、保育者の子ども理解の特徴を明らかにしておく必要があると考えた。

**目的:**そこで、本研究では、増加の途を辿る「気になる子」の『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』に対して、保育者がどのような子ども理解をしているかに着目し、保育者のもつ気になる子の育ちの理解の特徴を保育者の語りから明らかにすることを目的とした。

**方法:**公立・私立(認可)保育園・認定こども園の幼児クラスを担当する保育士・保育教諭30名に、インタビュー調査による半構造化面接を実施した。調査内容は、保育者が持つ未診断で発達障害の傾向のある「気になる子」の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とした。「気になる子」の定義は木曾(2016)による「未診断の発達障害の傾向がある子ども」の定義を採用した。また、得られたデータは、角南(2018)による「子どもの多面的理解」の分析を参考にして検討をおこなった。

**調査期間:**2018年10月～2018年12月

**結果と考察:**保育者から得た「気になる子」の、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿10項目を、角南

(2018)の子ども理解におけるカテゴリー生成【子どもの多面的理解】を参考に、検討をおこなった。その結果、以下のようなことが明らかとなった。〈健康な心と体〉では育ちの姿が行動に表出されやすい【行動特性】への着目が多く、〈自立心〉では【行動特性】を認めつつも、特性のため結果が出にくいことも多いが取り組みの過程を認める【努力承認】への着目が多い。〈協同性〉では、物事の捉え方に関する傾向性などを特徴とした【認知特性】と不適応行動をしてしまう子どもの【思考理解】が共存して生じていた。〈道徳性・規範意識の芽生え〉では【行動特性】【認知特性】への着目が強く「難しい」「苦手」等の見立てが生じていた。〈思考力の芽生え〉に【認知特性】を捉えながらも、特性のため結果が出にくいことも多いが取り組みの過程を認める【努力承認】や、子どもの持つ能力部分に対する【能力承認】生じていた。〈社会生活とのかかわり〉では、子どもの良い行動を評価する【行動承認】や、行動の背景にある子どもの【心情理解】がなされていた。〈数量・図形・文字等への関心・感覚〉では、【認知特性】を認めつつも、子どもの持っている能力部分に対する【能力承認】が多くなされていた。〈自然との関わり・生命尊重〉では【行動特性】を認めつつも【行動承認】を重ねながら育ちを理解している様子が多く伺えた。〈豊かな感性と表現〉では生来的な良い性質に対する【資質承認】と【認知特性】が生じていた。〈言葉による伝えあい〉では、【行動特性】【認知特性】【思考理解】が生じていた。これらの結果より、未診断であるため「特性理解」に至れないなど、個を捉える抽象度が高い中にあるとしても、保育者は定型発達に基づく【子ども理解】を頼りとしながら、育ちを捉えていた。併せて「気になる子」の特性を理解しつつも、特性とは異なる子どもの良さや内面の理解を意識的におこなっていることが推察された。

キーワード:気になる子・幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の10項目・幼児理解

## 起業家教育支援ハンドブック有効性の検討

○加藤駿 南部大輝

(創価大学宮崎猛研究室・教育学部)

### 1. はじめに

創価大学宮崎猛研究室では、創価大学教育奨励事業の支援を得て、高校生が、大学と企業と連携して社会貢献事業を考案・実践する SAGE JAPAN を運営している。SAGE とは Students for the Advancement of the Global Entrepreneurship の略であり、起業家精神を育成することで、若者を社会貢献の主体者に成長させることを目的としている。ここでいう起業家精神とは、起業のノウハウではなく、問題解決力、社会貢献力、提案力、創造力等を指し、これらの育成を通して、社会を変革する力を持った若者を育成することを目指している。また、SAGE は、中等教育と高等教育、公的教育と実業界、そして国と国との架け橋として位置づけられる。

### 2. 問題提起

本研究室が SAGE の活動を始めた動機は、内閣府による若者の社会貢献意識についての調査と創価大学生を対象に行った大学生の社会貢献の実態に関する調査に起因する。内閣府が 2014 年に 13~29 歳の日本人を対象に実施したアンケートでは、「社会現象が変えられるかもしれない」という項目に対し約 70%の若者が「いいえ」と回答した。また、本学の学生 358 名を対象にアンケートを実施したところ、学生が社会貢献に対して強い関心を持っていることが示され、「関心はあるが行動に移せていない」、「機会がない」と捉えている学生が多くいることが分かった。ここから、日本の若者が、社会問題に対して興味関心を持っていながら、それらの解決への期待感の低さと実践の機会の少なさという問題が浮かび上がった。この調査に基づき、「社会貢献のために何かをしたいと思っても自信と機会がない」ことを問題の定義とし、これを解決するために、本研究室は SAGE の活動を開始した。

### 3. SAGE の特徴

他のビジネスコンテストと比較すると SAGE の特徴は 4 点ある。1 点目は、プロジェクトの初期段階からプログラムが始まる点である。完成したプロジェクトを審査するのではなく、問題設定などの構成段階から、高校生と大学生がチームとしてプロジェクト作成に取り組むという特徴がある。2 点目は、事業を構想だけに留めるのではなく実践する点である。アイデアを形にするところまで行動することにより高校生が実際に社会に影響を与える実感を得ることができ、また、活動の過程では企業や NGO などに聞き取りや連携を行うことにより社会に触れる機会を創出している。3 点目は、大

学生の関わり方である。大学生はファシリテーターとしてチームを牽引する役割を担うため、SAGE は高校生だけではなく大学生自身の学びの場ともなる。4 点目は、国内大会だけでなく世界大会がある点である。世界に実際に行き、国外の高校生と交流することで、次世代を担う若者たちの世界の連帯づくりにつながる。

### 4. SAGE の価値

これまで SAGE の活動に参加してきた高校生、大学生の活動後の感想を基に SAGE の有用性をまとめると、社会貢献の実践の場という点と社会貢献が自分でもできるという自信を得る場という 2 点を、SAGE を通して与えられることが分かった。特に、大学生の「今まで行動せずに終わっていたことが多かったが、SAGE をやるのが自分にとって大きな挑戦になった」という感想や、高校生の「高校生でも社会貢献ができる」という実感が、これらの効果を裏付けている。

### 5. 課題解決に向けたハンドブックの検討

本活動は、創価大学の学生のみでは支援できる高校の範囲が限られているという課題を抱えている。今後、より多くの高校生を対象に SAGE の活動を展開するには、他大学にも SAGE の支部を設けることが必要となる。その際、本研究室が重要視している人間教育を根幹に据えた教育活動という面を損なわないために、昨年度、起業家教育支援のためのハンドブックを高校生向け、と大学生向けに作成した。本年度、試用版として同ハンドブックが実際に使用され、本年度より文京学院大学新田研究室・馬渡研究室の協力のもと同大学へ活動の拡大に成功、出場校数の増加を果たした。本研究は、実際にハンドブックを使用した有効性を検証する。

### 6. 今後の展望

SAGE JAPAN は 2012 年度に立ち上げられ、2013 年度より国内大会を開催するとともに、2016 年度よりは優勝校を世界大会に派遣するに至っている。昨年度はこれまで 5 回の支援の蓄積を元に、本学会の支援を受け、起業家教育支援のためのハンドブックを作成した。本年度は、試用版として同ハンドブックが実際に活動に使用され、文京学院大学での SAGE の活動も始動した。今後はさらに多くの大学へ本活動を拡大し、より多くの高校生の活躍の場を広げていくものである。本研究ではハンドブックの有効性をアンケートや聞き取りを通して検証し、加筆・修正を行い完成版を作成する。

キーワード: 社会貢献、高校生、起業家精神



○ポスター発表（掲示時間）10：00～12：00 B303

No.	在籍時間	テーマ・発表者（筆頭者）
1	10:00～ 10:30	乳幼児への言葉かけ「伝達・非伝達」経験の感情に関する研究 戸田 大樹／創価大学教育学部
2	10:30～ 11:00	乳幼児への語彙選定「伝達・非伝達」経験の感情に関する研究 戸田 大樹／創価大学教育学部
3	11:00～ 11:30	乳幼児の食育自然体験の実践事例と一考察 高橋 健司／創価大学つばさ保育所
		授業における先行オーガナイザーの導入が学習成果に及ぼす効果の検討 新谷しづ恵／聖徳大学大学院
4	11:30～ 12:00	幼児のスマートフォン使用に関する保護者の意識 ー逐語録を基にしたテキストマイニングによる分析ー 岸 正寿 生田ひまわり幼稚園

## 乳幼児への言葉かけ「伝達・非伝達」経験の感情に関する研究

○戸田大樹 大村良恵 直井知佳 佐々木智哉 高木麻理奈  
(創価大学教育学部) (創価大学教育学部 学生)

### I. はじめに

近年、新採保育者の離職要因には、言葉かけの力量不足に対する悩みも含まれている。戸田(2018)は保育者の乳幼児への援助である言葉かけに伴う感情に着目し、保育経験年数が保育者の乳幼児への言葉かけに関する「満足」や「自信」、「不安」の感情に影響を与えることを報告している。この結果から、保育者は保育実践の中で、自身の言葉かけが乳幼児に対して「伝達・非伝達」経験をj得る過程において positive と negative な両側面の感情を抱きながら成長していると考えられる。本研究では、保育経験が保育者及び学生の乳幼児に対する一斉保育時の言葉かけ「伝達・非伝達」経験に対する感情へ及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

### II. 方法

(1) 調査時期：2018年9月～11月

(2) 調査対象：保育者83(男性名2, 女性81名), 実習経験済学生60名(男性3名, 女性57名), 実習未経験済学生35名(男性16名, 女性19名)

### III. 結果と考察

保育者歴5年以上, 保育者歴5年未満, 実習経験済学生, 実習未経験学生の感情に与える経験年数を要因とする1要因の分散分析を行った。その結果, 言葉かけ「伝達」経験に関する経験年数の効果に有意差が認められた ( $F(3,174) = 2.973, p < .05$ )。Tukeyを用いた多重比較の結果, 保育者歴5年以上と実習経験済学生の組み合わせの間に有意差があり, 保育

者歴5年以上は実習経験済学生より感情得点が低かった。よって, 保育者歴5年以上は実習経験済学生より自身の言葉かけが乳幼児に対して「伝達」経験を積むことが, 新任保育者になってからの乳幼児への言葉かけの能力向上につながる重要性を低く感じていることが認められた。第2に, 言葉かけが「非伝達」経験に関する経験年数の効果に有意差が認められた ( $F(3,174) = 3.322, p < .05$ )。Tukeyを用いた多重比較の結果, 実習経験済学生と実習未経験学生の組み合わせの間に有意差があり, 実習経験済学生は実習未経験学生より感情得点が高かった。よって, 実習経験済学生は実習未経験学生より自身の言葉かけが乳幼児に対して「非伝達」経験を積むことが, 新任保育者になってからの乳幼児への言葉かけの能力向上につながる重要性を高く感じていることが認められた。

以上, 保育者歴5年以上は中堅保育者に該当するため, 自身の言葉かけが乳幼児に伝わっているかどうか高い基準で自己評価すると考えられる。また, 実習経験済学生は自身の実践知を試行する経験が限りなく少ないことから, 就職する前に「非伝達」経験を積んでおくことの重要性を感じているのではないだろうか。

### 参考文献

戸田大樹(2018). 保育者の乳幼児に対する言葉かけ及び語彙の意識に関する研究, 第71回日本保育学会研究発表大会.

## 乳幼児への語彙選定「伝達・非伝達」経験の感情に関する研究

○戸田大樹

大崎和枝 野村玲 丹治姫佳 金井七海 須内秀美

小野寺ちひろ 小川昌美 木田和美 七田唯

(創価大学教育学部)

(創価大学教育学部 学生)

### I. はじめに

保育教諭養成課程研究会(2016)は新任新採保育者と養成校学生が在学中に学んでおけば良かった内容として、言葉かけなどの技法を報告している。つまり、現職保育者は保育経験を重ねる中で、自身の言葉かけが乳幼児に対して「伝達・非伝達」経験を得る過程において不安や悩みなどの感情を抱きながら成長していると考えられる。しかし、経験の浅い新任保育者や保育者志望学生は乳幼児への言葉かけ以前に、語彙選定にも困難を示す傾向にある。

本研究では、保育経験が保育者及び保育者志望学生の乳幼児に対する一斉保育時の語彙選定の「伝達・非伝達」経験に対する感情へ及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

### II. 方法

(1) 調査時期：2018年9月～11月

(2) 調査対象：保育者83(男性2名, 女性81名), 実習経験済学生60名(男性3名, 女性57名), 実習未経験学生35名(男性16名, 女性19名)

### III. 結果と考察

一斉保育時の自身の語彙選定が乳幼児に対して「伝達・非伝達」経験が、新任保育者による乳幼児への「語彙選定の能力向上」に関係する感情得点に関して平均と標準偏差を算出した。次に、保育者歴5年以上, 保育者歴5年未満, 実習経験済学生, 実習未経験学生の感情に与える経験年数を要因とする1要因の分散分析を行った。

その結果、語彙選定が「伝達」経験に関する経験年数の効果に有意差が認められた( $F(3,170) = 6.024, p < .01$ )。Tukeyを用いた多重比較の結果、保育者歴5年以上と実習経験済学生の組み合わせの間に有意差があり、保育者歴5年以上は実習経験済学生より「伝達」経験に関する感情得点が低かった。よって、保育者歴5年以上は実習経験済学生より自身の語彙選定が乳幼児に対して「伝達」経験を積むことが、新任保育者になってからの乳幼児への「語彙選定の能力向上」に直接的につながるとの重要性を低く感じていることが認められた。

実習経験済学生は保育経験が浅いことから「伝達」経験を重要視する傾向にあるだろう。また、保育者歴5年以上者は自身の乳幼児への語彙選定を向上させる視点として、「伝達」経験を積む以外にも重要な視点を抱いていると考えられる。中堅保育者に成長するには3年から5年を要するとの報告もあるが、不安や悩みなどを乗り越えてきたからこそ見える視点や考えがある。

今後の課題は、保育者や学生の乳幼児に対する語彙選定「伝達・非伝達」経験において、その経験における重要性の割合の差異を明らかにすることである。

### 参考文献

保育教諭養成課程研究会(2016). 「幼稚園教員養成課程カリキュラムと現職研修とのギャップの検証 報告書「新卒ギャップ」に関する研究—幼稚園教員養成校学生との比較—」, 34.

## 乳幼児の食育自然体験の実践事例と一考察

高橋 健司  
(創価大学つばさ保育所)

### はじめに

平成 29 年 3 月に改正された保育所保育指針には、第 1 章総則 4 項「幼児教育を行う施設として共有すべき事項」が追加され、「(2) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として 10 の項目が明記された。

その中に「自然との関わり・生命尊重」の項目があり、「自然に触れて感動する体験を通して自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心を高めるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。」との内容になっている。

筆者の勤務する保育所は自然豊かな大学の敷地に隣接し、日頃の散歩の中にも自然を体感する機会に恵まれている。また、近隣住宅との距離が離れており、十分な広さの園庭を有していることから、釜戸に火を入れて手作りの給食やおやつなどが作れる環境にもなっている。

今回、乳幼児の実践している食育自然体験の事例を紹介し、どのような保育へと展開され、乳幼児の関心の高まりへと繋がっているか考察していきたい。

### 1.1 おいもほり活動を中心とした食育

5 月：園庭の畑（花壇）に「さつまいも」の苗植え

11 月：おいもほり→ 焼き芋・スイートポテト作り

**保育の視点** 木の上に実る果実のように普段目にすることはない芋。しかし、時が経ち、土の中で育ったさつまいもを掘り上げた時、子ども自身が日々水をあげ育てた結果を目にする。土の中で育つさつまいもはどのようにして大きくなっているのか。大きい芋もあれば小さい芋もある。自然のおもしろさを感じる瞬間である。

また、自分でアルミホイルを巻き、石焼の石の上に置く。硬かった芋が、出来上がると柔らかくなる。いい香りがする。火を使って熱を通すことで食材が変化することに気づく機会となる。

### 1.2 あんずジュース作りを中心とした食育

6 月：キャンパス内にあるあんずの木よりあんずを収穫する・ビン詰め

7 月：あんずのエキスが出来る・ジュース作り

**保育の視点** 普段の散歩コースに実るあんずを収穫する楽しさを感じるころから始まる。自然界の動物や古来の人間も、自然の中にある実を食して生きてきた。原体験ともいえるべき体験をすることができる。

収穫したあんずは洗ってビンに詰めるが、その際に氷砂糖と一緒に入れる。子どもは「どうやってジュースになるの？」との疑問を持つ。「飲めるのはあと〇日だよ」と伝え、時間の感覚を身に付けていく。乳幼児期の発達段階にある「今日」や「明日」、「昨日」という感覚を、氷砂糖からエキスに変わっていく過程の中で体験的に感じられる機会となっていた。

### 1.3 原木シイタケの収穫を中心とした食育

10 月：原木の水入れ（発生作業）

11 月～12 月：シイタケが生え、収穫・包み焼

**保育の視点** 野菜や果物などの成り立ちについては、絵本などで知るきっかけはあるかもしれないが、きのこ類は普段の給食ではよく取り扱われる食材であるにも拘らず、その成長過程や収穫方法まで伝える絵本や子ども向け動画等を見たことがない。

きのこの形をした帽子をかぶり、「きつ、きつ、きのこ♪」と歌に合わせて歌い、関心を高める。発生作業を終えた原木から小さな頭が出てきて、日に日に大きくなるのを眺め、そして大きくなったら原木から素手で採る。大人でも知識はあっても体験したことのある人は多くはない。原木から採れたシイタケを包み焼にすると、それはよく食べていたが、確かにスーパーに並んでいる食材との「味の違い」を体験する絶好の機会となった。

### まとめ

食育は自然体験の中で行われることにより、味覚だけでなく視覚・嗅覚・聴覚・触覚などの五感や、時間感覚も養われる機会となっていた。

今後は保育の中で生きている生き物（魚や鶏など）を捌き、食すことを通して、「命をいただくこと」について伝え、生命の不思議さや尊さを感じる食育自然体験を実践する中で、子ども達はは何を感じているか考察していきたい。

## 授業における先行オーガナイザーの導入が学習成果に及ぼす効果の検討

○新谷しづ恵  
(聖徳大学大学院児童学研究科)

戸田大樹  
(創価大学教育学部)

### はじめに

これからの社会が学校教育に求めるものは、基礎的な知識及び技能を活用して、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力・その他の能力から構成されるバランスのよい確かな学力を身につけた生徒の育成である。そのような生徒を育成するためには、すべての生徒に対して、理解しやすく学習成果の高い指導法を明らかにすることが必要である。

これまでも、多くの研究者が効果的な指導法について研究している。その中で、それまでの教授型指導法とは異なり、多くの研究者や教育者から高く支持された、Bruner(1961)の提唱する発見学習がある。

発見学習は、学習者にいろいろ体験させ、自ら概念や法則性を考え出させる指導法であり、学習過程で試行錯誤を繰り返すため、知識の獲得が速く学習意欲も高まり、他の場面への応用も利くと、我が国の多くの研究者や教育者にも多大な影響を与えた。

それに対して Ausubel(1960)は、発見学習にも限界があり、中学生くらいでは、複雑で抽象的な関係を直接有意味受容学習で獲得できるとし、先行オーガナイザーを活用する有意味受容学習の有効性を主張した。有意味受容学習は、新しい学習内容を学習者の認知構造の中に受容させるために、新しい学習内容と既に学習者が所有している認知構造とをつなぐ手がかりとして先行オーガナイザーを活用する指導法であり、先行オーガナイザーの特性から、機械的に記憶するものではなく、組織的で全体的な構造を持つ学習教材に効果的である。つまり、先行オーガナイザーを活用する有意味受容学習は、今中学生に求められている確かな学力を育成する指導法であ

ると考えられる。

そこで、公立中学校生徒を対象に、理科の授業を通して学習成果の高い指導法を調査研究した。調査結果は、統計的に分析検討した。

### 方法

1. 調査対象：中学校2年生 115名。
2. 調査内容：教材は「電流と電圧」である。生徒はA群とB群に振り分け、A群には発見学習法で、B群には有意味受容学習法で授業を実施し、授業後にテストを行い、その結果を統計的に分析した。

### 結果・考察

テスト結果を、指導法(発見学習・有意味受容学習)×学力(高群・低群)×テスト時期(中間・事後)の3要因混合計画で分散分析したところ、指導法要因とテスト時期要因の交互作用が有意であった。指導法要因とテスト時期要因の単純主効果を検定したところ、有意味受容学習法群のテスト結果が有意に高かった。

したがって、先行オーガナイザーを活用する有意味受容学習は、今回調査した教材では、学習成果を高める指導法であるといえるのではないだろうか。

### 引用文献

- Ausubel, D. P. (1960). The use of Advance Organizers in the Learning and Retention of Meaningful Verbal Material. *Journal of Educational Psychology* 51(5), 267-272.
- Bruner, J. S. (1961). The process of education. Harvard University Press. (訳)鈴木祥蔵・佐藤三郎(1963). 教育の過程 岩波書店

キーワード：発見学習、有意味受容学習、先行オーガナイザー

# 幼児のスマートフォン使用に関する保護者の意識 — 逐語録を基にしたテキストマイニングによる分析 —

岸正寿

(生田ひまわり幼稚園)

## 1. 問題と目的

スマートフォン<sup>1)</sup>は、現代社会において急速に普及し、幼児を持つ保護者としては欠かすことのできない情報インフラの一つとなっている。そのスマホが幼児に与える影響に関する実証的な研究はなされていない。スマホは、幼児だけで使用するのが困難であり、利用の開始時には保護者の持っているスマホを幼児に与えているのである。

近年、スマホの使用に伴い、眼の調節緊張や睡眠障害、ストレートネック等の健康障害が問題視されている。

本研究の目的は、幼児のスマートフォン使用に関する保護者の意識を保護者へのインタビュー記録をテキストマイニング分析で明らかにすることで、今後の幼児のスマホ利用のあり方について検討することを目的とする。

## 2. 方法

### (1) 調査対象者

調査対象者は、各施設の園長に研究説明・依頼を行い、協力の承諾を得られた幼稚園児の養育者 13 名 (3~5 歳児の母親) と保育園児の養育者 13 名 (2~6 歳児の母親 11 名、父親 2 名) の計 26 名であった(表 1)。

対象者	養育者の年齢	養育者の性別	幼児の年齢	幼児の性別	施設別	母職業の有無	父職種	母学歴	父学歴
F1	42	女性	年長	男児	幼稚園	無	広告	大卒	大卒
F2	40	女性	年中	男児	幼稚園	パート	教員	大卒	大学院卒
F3	32	女性	年中	女児	幼稚園	無	自営業	高卒	高卒
F4	41	女性	年少	女児	幼稚園	無	会社員	短大卒	大卒
F5	38	女性	年長	女児	幼稚園	パート	IT	高卒	大卒
F6	29	女性	年長	男児	幼稚園	パート	営業	高卒	大卒
F7	45	女性	男児	男児	幼稚園	パート	Web制作	専門卒	高卒
F8	36	女性	年少	男児	幼稚園	パート	教員	大卒	大卒
F9	42	女性	年中	女児	幼稚園	フルタイム	団体職員	大学院卒	大学院卒
F10	37	女性	年少	女児	幼稚園	無	建設業	大卒	大卒
F11	48	女性	年中	女児	幼稚園	無	会社員	専門卒	大卒
F12	32	女性	年中	男児	幼稚園	育休中	商社	大卒	大卒
F13	41	女性	年長	女児	幼稚園	パート	運送業	高卒	専門卒
F14	41	女性	年中	女児	保育園	フルタイム	会社員	専門卒	専門卒
F15	35	女性	年少	男児	保育園	フルタイム	サービス業	大卒	大卒
F16	40	女性	年長	男児	保育園	フルタイム	運送業	専門卒	大卒
F17	44	女性	年中	女児	保育園	フルタイム	未回答	短大卒	未回答
F18	31	男性	2歳児	女児	保育園	フルタイム	教員	大卒	大卒
F19	35	女性	2歳児	女児	保育園	フルタイム	自営業	大卒	大卒
F20	38	男性	2歳児	男児	保育園	フルタイム	医薬品製造	大卒	大学院卒
F21	39	女性	年長	男児	保育園	フルタイム	会社員	大卒	大卒
F22	40	女性	年長	男児	保育園	フルタイム	会社員	大卒	大卒
F23	36	女性	2歳児	女児	保育園	フルタイム	エンジニア	大学院卒	大学院卒
F24	36	女性	2歳児	男児	保育園	フルタイム	会社員	大卒	大卒
F25	32	女性	年少	女児	保育園	フルタイム	会社員	専門卒	高卒
F26	43	女性	年少	女児	保育園	フルタイム	Web制作	短大卒	大卒

表 1 対象者の概要

### (2) 調査期間

調査期間は、2017年11月30日~12月20日。

## 3. 結果と考察

スマホの使用頻度は毎日 9 人(34.6%)が最も多く、使用用途は、YouTube の利用を通しての動画の視聴が最も多く、次いでカメラ機能を使用した写真の撮影・閲覧をしていることが明らかとなった。

本研究の結果は、ベネッセ教育総合研究所が行っている「第 2 回乳幼児の親子のメディア活用調査」の先行研究の結果を支持するものであり、今後さらに幼児にスマホが浸透していく可能性が示唆された。頻出語、対応分析、頻出語クラスター分析、コロケーション表においても幼児が動画の視聴や写真の撮影・閲覧をしている様子が連想された。また、スマートフォンは従来のテレビや iPad に比べて画面が小さいことから、視力への心配な影響を気にする語りも確認された。

養育者は、スマホが幼児に与える影響に関して「悪い」よりも「良い」と感じていることが明らかになった。しかし、スマホの視聴の早期からの接触・視聴、スマホの使用が長時間であると感じていることが示された。

保護者が子どもと一緒に動画や YouTube、写真を見たりして使用することで、使用時間をコントロールしていることが推察され、保護者は、LINE を用いて育児に関する相談をしており、スマホは子育てに必要なものとして扱われているが、子どもが使用することについては、視力への影響、早期からの接触・視聴、長時間使用などが懸念された。

しかし、一方で、スマホが幼児に与える影響に関して「良い」と感じていることも明らかになった。

キーワード: スマートフォン, 幼児, テキストマイニング, 保護者の意識

## 注

1) 本研究では、スマートフォンとスマートフォン以外の携帯電話を区別することとし、スマートフォンと「スマホ」は、同義語とする。

## 文 献

ベネッセ教育総合研究所, 2017, 「第 2 回 乳幼児の親子のメディア活用調査 速報版」  
(<http://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=5208>, 2019年1月13日確認).

樋口耕一, 2014, 『社会調査のための軽量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』 ナカニシヤ出版.

## ○自主シンポジウム 13：30～15：30

会場	テーマ・企画者
B401	現代における幼児教育・保育の現状と課題 戸田 大樹 創価大学教育学部
B404	教員の専門性を活かす学校経営～「自律性」を視点とした学校の 創造を考える～ 橋本 和男 創価大学教育学部
B301	インクルーシブ教育システムにおける特別支援教育の未来を考え る ～小学校・中学校・高等学校の現状から～ 山内俊久 創価大学教育学部

## 現代における幼児教育・保育の現状と課題

### —保育者に求められる専門性—

企画・司会者：戸田大樹（創価大学教育学部 講師）

話題提供者：角田富美子（元東京都公立幼稚園 園長）

榊原久子（新渡戸文化短期大学 准教授）

小山容子（創価大学教育学部 講師）

高橋健司（創価大学つばさ保育所 園長）

岸正寿（生田ひまわり幼稚園 講師）

質問者：大村良恵 直井知佳 佐々木智哉 高木麻理奈（創価大学教育学部 学生）

#### ■企画趣旨

幼稚園教育要領及び保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改訂され、幼稚園・保育者・幼保連携型認定こども園と小学校教育との円滑な接続が明記されている。幼児期の発達特性から、幼児の主体的な遊びを重視するなかで、人間形成の基礎や学習の基盤を育成することが幼児教育・保育の基本である。しかし、近年の学力などの低下という現状から、幼児教育・保育の現場では、保育者主導の早期教育や小学校教育への準備教育が行われるなど、子どもたちの主体的な遊びが小学校の学習や集団適応への低下を招いているという誤解も広がっている。

これらを踏まえ、幼児教育・保育を学ぶ学生にとって、今、何を学ぶべきかが問われている。そこで、このシンポジウムでは、保育者志望学生と共に現代における幼児教育・保育の現状と課題、保育者に求められる専門性について学ぶ機会とする。

#### ■話題内容

今、改めて幼児教育・保育の重要性が世界的に注目されている。しかし、日本では保育の質の低下が問題視されている。本企画では、「現代における幼児教育・保育の現状と課題」について5つの視点から議論し、保育の質の向上に大きく関与している「保育者に求められる専門性」を追求する。まず、現在の誤った早期教育の現状を鑑み、過去から現在までに受け継がれてきた幼児教育の基本について立ち返る。また、乳幼児を受け入れる幼稚園や保育所、幼保連携型認定こども園の課題について、現職の園長が制度の面から切り込む。さらに、医療ケアが必要なこども家庭や、外国籍のこども家庭に対する支援についても言及する。最後に、現職保育者が抱く専門性の課題について報告してもらう。

これらの現状と課題を整理し、保育者志望学生と共に「こどもの幸福」のために求められる幼稚園教諭や保育士、保育教諭の専門性について検討する。

## 教員の専門性を活かす学校経営

### ～「自律性」を視点とした学校の創造を考える～

○橋本和男（創価大学教育学部非常勤講師）

●浜田博文（筑波大学教育学域学校経営学 教授）

古家義伸（東京都小金井市立本町小学校 元校長）

澤登一浩（山梨県南アルプス市立若草小学校 校長）

#### 1 教員の専門性とは

子どもは素晴らしい。そして、可愛い。未来に向かって能動性と可能性に秘めた存在である。人間が人間として目の前の子どもを慈しみ愛することは、「教育」という営みを考えていく大前提であり、生きることの本質である。

「どの子どもも善くなるようにしており、善くしようとする働きが教育である」と教育学者の村井実氏は教育の定義を述べている。すなわち、学校は、その教育の機能を最大限に発揮する場であり、その役割を担うのが教員である。

その学校が存在理由は、「児童の幸福なる生活をなさしむること」を目的性として完遂することである。私たち教員は、その教育のプロセスに生じる現象の中で、子どもたちと共に生き続けている。児童を成長させ幸せな人生を送ってほしいとの願いは、人間教育のエートス（資質・能力）の根幹である。エートスとは、人間の自覚を超え、日常的な人の振る舞いを指し、教員の専門性の根底を為すものであると捉えている。

「生きる」ということは、変化し続けることである。すなわち教育の根源には、「成長」というダイナミズムの発現がある。学校は、人と人が関わり合い、交流・触発しあいながら、お互いが成長する場である。その中心には、「学び」という創造性の源泉が見える。子どもも教員も学校も、その学び続ける変化の中にあり生きている。

私たち教員は、ここで述べる人間教育の教育理念を根幹にして、教育に邁進してきた。現実の現場の最前線で、様々な出来事に遭遇しながら、一心に「子どもの成長のため」にと生き続けてきた。どんな困難な状況にあろうとも、教育への信念を貫き通し、必死になって悩みながら知恵をわき出だして進んできた。

その経験から見えてきたことの一つに、「学校は人の関係の中で存在している」という至極当たり前の結論である。学校には、多くの子どもたちと教員がいる。その関わりを織りなす世界が学校であり、確かに豊かな関わりなくしては、学校という組織のパフォーマンスを引き出していくことは不可能である。

子どもたちの成長は、環境による影響を受ける。学校教育での最大の環境は教員である。個人の教員相互の関係もまた、学校組織としての環境となる。その組織に所属する教員一人ひとりが、自らがもつ個性を輝かせ、主体性あふれる姿に教員としての専門性を見とれる。教員同士がお互いに触発しあい、生き生きと意欲的にふるまう組織は、学校には必要不可欠な要素である。組織が活性化するには、どうしたらよいのであろうか。その要因を探りたい。

#### 2 「自律性」を視点として

「学校経営は難しい」といった言葉が、校長職を経験した率直な感想である。よく学校の改善は校長のリーダーシップ力によると言われる。計画的に指示命令で、学校が望ましい方向に改善できればよいが、実際の組織は複雑な要因が絡み合っている。では、教員の専門性を活かし機能させていくにはどうすればよいのか。

その学校組織の活性化を図っていく視座として、「自律性」が考えられる。人間が個性豊かに自己実現に向かう姿を自律性に富んだ状態と言える。心理学では、モチベーションにおける自律性、主体性に着目した「自律的動機づけ」論がある。組織というシステム論を重ね合わせると、自律的動機づけには、その生成条件として「関係性」が見えてくる。つまり、学校の教員関係は、互いに承認し、共感性のある「親密な人間関係」「ふれあい」、さらには「支援」という相互交流が必要であることがわかる。そして、その「同僚性の構築」という関係性は、学校の自律性を樹立していくために必要な要素であり、教員が有する専門性を相乗的に「エンパワーメント」として発揮させることができるのである。

#### 3 学校の創造を続けるためには

学校は、常に現象の中を生き続けることが求められる。その方向には、必然として不確実性や予測困難な出来事が起こる。その課題を解決していく中に、実際の教育活動があると言っても過言ではない。学校の創造とは、そのプロセスそのものであり、今あることを生き様として「始まり」を常に因として未来に向かっていく。

では、学校組織は、何をどのように改善し、複雑性を有する課題に対して立ち向かっていけばよいのであろうか。さらに、同僚性を形成、維持する要因は何であり、手だてとしての具体的な方策はどうしたらよいのか。

本シンポジウムにおいては、学校を「変化」「成長」させ「創造」した学校経営の実践の事実と実践にある知を理解することにより、学校経営に必要な観点を見いだしていきたいと考える。

そして、その討議の中から、学校の現場が抱える具体的な学校組織の課題を認識するとともに、本シンポジウムの指定討論者として招聘した学校経営学の専門家から学問的な知見を学び、これからの学校経営の改善及び学校組織のあり方を模索していきたいと思う。

キーワード：教員の専門性、学校の自律性、変化と創造性

## インクルーシブ教育システムにおける特別支援教育の未来を考える ～小学校・中学校・高等学校の現状から～

企画者：山内 俊久（創価大学教育学部児童教育学科）  
司会者：山内 俊久（創価大学教育学部児童教育学科）  
話題提供者：高階 美恵子（臨床発達心理士）  
：深谷 純一（東京都教育庁指導部特別支援教育指導課）  
：濱辺 清（東京都教育庁中部学校経営支援センター経営支援室）  
指定討論者：加藤 康紀（元創価大学教育学部児童教育学科）

### （企画趣旨）

2017年から2018年にかけてわが国では、「障害者の権利の条約」への批准後にはじめて改正された学習指導要領が、小学校及び中学校、高等学校、特別支援学校（小学部・中学部、高等部）にわたり告示された。その間、小・中学校における通級による指導の整備と「特別支援教室の設置」、「柔軟な転学」や高等学校における通級による指導が整備された。それはわが国のインクルーシブ教育システム構築に向けた環境整備でもある。

全国数値でも特別支援教育の対象と思われる児童生徒の増加傾向は衰えを見せず、近年の都内中学校特別支援学級から高等学校への進学者の割合も増加傾向である。本シンポジウムにおいては、小学校及び中学校、高等学校における特別支援教育の現状について、就学相談や義務教育後の進路指導等の実務経験のある者からの報告を受け、インクルーシブ教育システム時代を迎えた特別支援教育の未来像追求の一步を考える。

### （話題提供1）

平成30年度、都内の全公立小学校に「特別支援教室」が設置された。指導対象児童は、これまでの情緒障害等通級指導学級とほぼ同じ情緒障害や発達障害の児童である。各校に設置されたことによって、通常学級に在籍する学習上・生活上の困難がある児童の支援がし易くなった。また、「特別支援教室専門員」や「臨床発達心理士」等によるサポートも制度化された。そこでは、在籍学級の担任や特別支援教室の担当者の相談、当該児童の特別な指導についてのアドバイスもする。当該児童を取り巻く環境によっては、インクルーシブ教育の内容も変化する。特別支援教室の利用の判断も含めて、個の教育ニーズにいかに対応するかが重要な視点である。

### （話題提供2）

就学相談は子供にとって最もふさわしい教育の場を保護者とともに考える場である。障害のあるなしに関わらずできる限り同じ場で学ぶことと、それぞれの子供が、授業内容がわかり、学習活動に参加している実感・達成感をも

ち、充実した時間を過ごし、生きる力を身に付けられるという方向性が求められる。平成25年の法令改正で「連続性のある多様な学びの場」への「柔軟な転学」のシステムが導入され、義務教育段階における「学びの場」の整備が進展した。いずれの場の学びでも「自由な社会への効果的な参加」（「障害者の権利に関する条約」24条）を可能とするためのポイントは何かを示していく。

### （話題提供3）

東京都では様々なタイプの高等学校を設置し、知的障害を伴わない発達障害のある生徒が受け入れられてきた。近年の中学校特別支援学級出身者の進路先動向を見ると、平成24年度以降の高等学校進学者数は増加傾向となっている。全国的には少子化という状況のもとではあるが、高等学校での特別支援教育体制の整備が進み、高等学校教育を受ける生徒への経済的支援制度も拡充されたことが要因と考えられている。高校進学する知的障害が軽い生徒も含め、義務教育段階で特別支援教育を経験してきた生徒が社会的・職業的自立を果たすためには何が必要かを考察する。

### （指定討論）

「インクルーシブ教育システム」とは、形態だけを言うならば、「障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組み」である。このことが、善いか悪いか論じても意味がない。

目的が達成できるかどうかである。「人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とする」ことである。

今回は、通常の学級に在籍する児童を対象とする「特別支援教室」の実態、また、就学相談、進路相談の現状等を踏まえて、小学校から高校までの特別支援教育の未来を大きく考えてみたい。

現実には、多くの課題が山積する分野である。フロアーの現場の先生方にも喫緊の課題があるだろう。しかし、夢も語っていただけるとありがたい。夢を持ち続ければ、必ず衆知は英知に結実すると信じるからである。

キーワード：特別支援教室 就学相談 進路指導

第 17 回教育研究大会 運営組織

2018（平成 30）年度創価大学教育学会運営委員会

会 長 長島 明純 （教職大学院）

運営委員 平井 康章 （学部教授会）

富岡比呂子 （学部教授会）

杉本 久吉 （学部教授会）

戸田 大樹 （学部教授会）

宮崎 猛 （教職大学院）

余保 賢一 （大学院生）

林 恒樹 （大学院生）

関谷 悠希 （学部学生）

西澤 裕美 （学部学生）

創価大学教育学会第 17 回教育研究大会研究発表要旨集録

2019（平成 31）年 2 月 16 日発行

編集・発行 創価大学教育学会事務局

〒192-8577 東京都八王子市丹木町 1-236 創価大学教育学部・教職大学院

創価大学教育学会事務局

E-mail [wwwsuesjp@gmail.com](mailto:wwwsuesjp@gmail.com)



# 創価大学教育学会へのおさそい



創価大学教育学会は、建学の理念に基づき、教育学およびこれに関連する学術の研究を推進し、会員相互の交流を行うとともに、本学の学生や卒業生（修了生を含む）の教育研究の充実に寄与することを目的として以下の事業を行っています。



会員の研究促進を目的とする「総会」「講演会」「研究会」等の主催・後援  
機関誌「創大教育研究」の発行（Web版）  
在学生会員の教育研究の補助  
会員間のネットワークづくりと情報提供 など

会員として「総会」「講演会」「研究大会」等の機会に母校に戻ったり、機関誌を読んだりして、最近の研究動向等に触れながら、ご自身の学びの歩みを振り返る機会とすることができます。時には、情報の受け手ではなく、「研究会」や機関誌を通じて、研究成果や実践を発信する側にもなることができます。

卒業生の皆さんで、教職や研究職を目指される方はもちろん、他の職にあっても教育についての学びを深め継続したいという気持ちがある方は、ぜひ入会されることをお勧めします。

## 入会手続き

<http://www.sues.jp/ktetsuzuki.html> にアクセスして、必要事項を入力し送信して下さい。折り返し、事務局より入会手続きの手順についてお知らせいたします。運営委員会では承の後、会費の振込み方法等をご案内致します。

## 会費・納入方法（振込みは入会手続き終了後に）

会 費 在学生、卒業・修了生 -- 年額 1,000 円（複数年分まとめて納入することも可能です）

振込先・口座

◇ゆうちょ銀行 郵便局から（口座番号等）00100-2-741065

銀行から（支店名）〇一九店（店コード）019

（預金種目）当座（口座番号）741065

（加入者名・受取人名）創価大学教育学会（ソウカダイガクキョウイクガクカイ）

※振込用紙を使える場合には通信欄に「〇〇年度の会費」と必ず記入して下さい。

◇三菱UFJ銀行

（支店名）八王子中央（店番）226（口座番号）4344490

（口座名義）ソウカダイガクキョウイクガクカイ カシマ アキミ

※振込みの際は、氏名に続けて「〇〇ネンドカイヒ」と入力してください。



